川原田遺跡「新巻類型」と「焼町類型」

—両類型をとりまく型式組成から—

群馬県埋蔵文化財調査事業団　山口逸弘

Ⅰ　はじめに

御代田町川原田遺跡は、綿密な発掘調査に裏打ちされた良好な資料群を提示し、特に縄文時代中期中葉段階の土器群は、遺存度も高く、該期の研究者のみならず、多くの縄文研究者に注目されている。さらに、完形の土器群は考古美術の分野からも、脚光を浴びる装飾土器群であろう。

筆者は、川原田遺跡出土の中期土器群に接して、従来筆者が抱いてきた、関東北西部—利根川上流域の中期土器を主とした考え・分析が大きく揺れ動いたのは言うまでもない。実際に、川原田遺跡の中期土器群に接する度に、新たな観察項目を見いだし、従来の南関東・中部山岳地方の土器を中心とした該期土器研究の視点では計り知れない資料としての位置付けを感じていた。

今回、御代田町教育委員会堤隆氏のご配慮で、報告書執筆の一部に係わらせていただくことになったが、これまで筆者なりに、関東北西部の土器群に際した観察視点を踏まえて、本遺跡出土土器を考えてみたい。

長野県千曲川流域や群馬県利根川上流域の中期中葉の遺跡では、特徴的な土器群の出土さらに異系統土器群の共伴現象が知られている。筆者は、特に利根川上流域の幾つかの中期遺跡や中期中葉の土器群に関して、これらの現象を基準にして若干の分析を試みてきた。その分析の手法としては、一遺跡・一遺構内の異系統の土器群の共存を重視し、共存する土器文様の相互影響を捉え、文様の変化を捉える視点を重視して行った。さらに、特徴的な土器群の一部に関して、まとまりを持った一群に対しては「類型」としてまとめ、他の型式群との比較検討を試みてきた。

分析を進めて行くに従い、利根川上流域の中期中葉土器文様の複雑な位相と相互の関連が明らかになり、周辺地域との密接な関係が推定されてきた。無論、川原田遺跡をはじめとする千曲川流域の該期出土土器の様相も、上記のように複雑な様相を呈しており、かつ利根川上流域の資料との様々な共通性が予測されている。

言う成れば、千曲川流域や利根川上流域は、佐藤達夫氏の提起した一遺跡及び一遺構内の異系統土器群の共存現象（註１）が、具体的に確認される地域であり、川原田遺跡の中期中葉段階もこの現象が顕著に観察される良好な出土土器様相を提起しているのである。

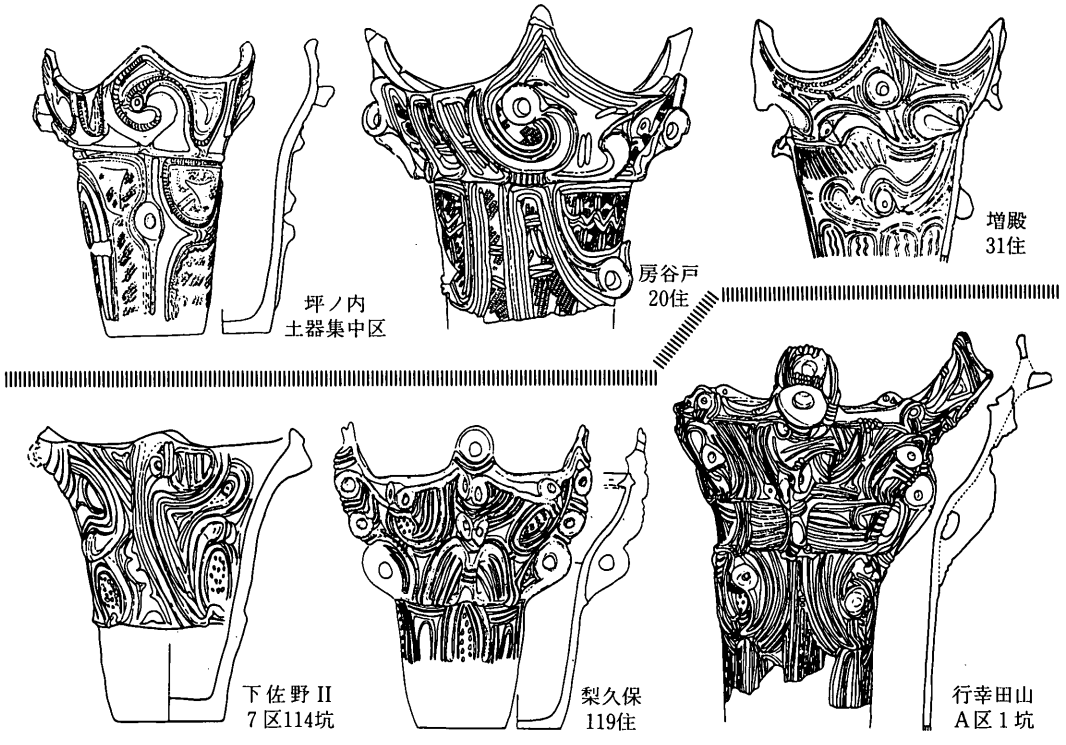
以上の例を踏まえて、川原田遺跡出土土器の様相を考える際も、一遺構内の異系統土器群の共伴を重視し、様々な特徴を明記したい。その際に、筆者が従来使用してきた用語として「新巻類型」と「焼町類型」を特徴ある土器群に充て、分析を進めていくが、この分析を通して類型ある

いは中期土器型式を含めて、土器群の在り方を捉えることができれば、本論の目的の一つは多分ながら果たせられることになる。

故に本論の目的は、川原田遺跡出土土器群が語る、群像と地域相の一側面を明確にすることにあり、出土土器に詳細な時間軸を与える編年研究や土器の変遷を目的とはしていない。その点はご容赦願いたい（註２）。

２　川原田遺跡「新巻類型」・「焼町類型」の様相

前述のように、かつて筆者は、利根川上流域より出土する特徴ある中期中葉の土器群の一部に「新巻類型」・「焼町類型」といった用語を充て、分析を進めてきた（註３）。その際、「新巻類型」は阿玉台式に、「焼町類型」は「焼町土器」（註４）とほぼ同義で勝坂式に影響を受け、発生したものと捉えた。参考までに第１図に筆者が提示した「新巻類型」と「焼町類型」を掲げたが、資料の増加は果たせるものの、実測図等の整備の遅れもあり、新資料が提示できない現状である。その後、両類型に関する各研究者の様々な視点が提示されるに至り（註５）、再度両類型の在り方



第１図　「新巻類型」と「焼町類型」

を再検討する段階に係っている。

本報告書報文中に述べられているように、川原田遺跡における両類型の出土は著しい量である。縄文時代中期中葉において、関東地方における勝坂式と阿玉台式の対峙する関係は、既に中期研究において明白になっているが、川原田遺跡の両類型の在り方は、勝坂式・阿玉台式という両極の土器型式と「地域土器群」との関連を考えさせる様相である。

川原田遺跡では、縄文時代中期中葉に比定される住居跡は23軒が調査されている。各住居跡の出土土器は、各々特徴が認められ単純な様相ではない。出土器種も大型深鉢・小型深鉢・浅鉢と多様性が見られるように複数の個体が伴出する。出土土器の内容も異系統の土器群の共存が観察され、交叉編年作業等には絶好の資料を提供している。ただし、交叉編年作業は広域の土器群が対象となり、本遺跡の周辺－特に群馬県西部地域の資料が整備された段階で試みるべきである。

本節では、川原田遺跡出土の「新巻類型」・「焼町類型」を伴出する住居跡出土土器を中心に、共伴関係の傾向を把握することによって、その型式組成を確認していきたい。その際に、出土土器から得られる両類型の特徴を捉え、今後の分析視点も提示していきたい。

（１）　川原田遺跡「新巻類型」と共伴土器

「新巻類型」が出土する住居跡は、Ｊ－９号住・Ｊ－20号住・Ｊ－24号住・Ｊ－25号住・Ｊ－50号住・Ｊ－51号住の６軒である。各住居跡の出土土器の組成と「新巻類型」の特徴を概観する。

Ｊ－９号住（第２図ａ）　１・２を「新巻類型」と判断したが２は体部下半のみで全体像が判然とせず確定できない。３・４は勝坂１式と考えた。５の浅鉢も該期に見られる器形である。

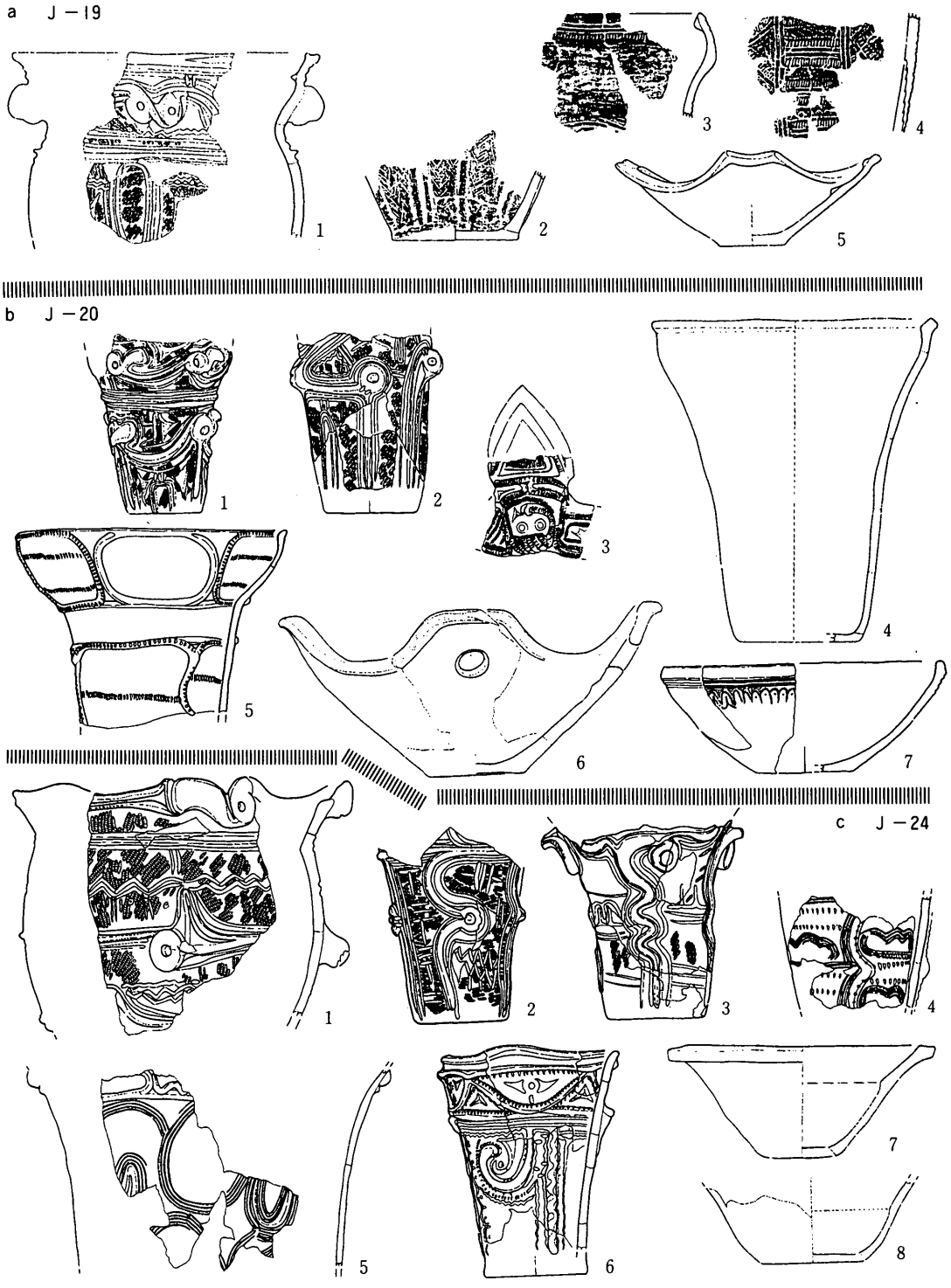
１は大型破片ながら、口縁部形態は判然としない。体部は球胴状で甕状深鉢の可能性は極めて高い。また、口唇部に残存する沈線から緩やかな波状口縁とも捉えられ、口縁部に付される双環状突起は波底部対応の意匠とも考えられよう。

Ｊ－20号住（第２図ｂ）　２個体の「新巻類型」が個体図示されている（１・２）。その他に新道式系の深鉢突起（３）、阿玉台II式の深鉢（５）、無文の深鉢１個体（４）、浅鉢２個体（６・７）が伴出している。

「新巻類型」とした２個体とも、口縁部形態は不明であるが、体部はほぼ直線状をなし、前述のＪ－９号住の甕状深鉢と差が見られる。体部文様は両個体とも懸垂文構成と捉えられ、「新巻類型」の標準的な文様構成と判断した。

Ｊ－24号住（第２図ｃ）　「新巻類型」は３個体が出土する（１～３）。共伴する個体は勝坂１式（６）・阿玉台II式（４・５）や浅鉢（７・８）が見られる。

１は甕状深鉢と捉えられ、幅狭の口縁部文様帯に弧状突起を付す。体部文様帯は環状突起を中核に隆線が派生するが横位方向に設けられており、上位に施される波状沈線文も横位である。下



第２図　川原田遺跡Ｊ－９・Ｊ－20・Ｊ－24号住居址出土土器（１：８）

第３図　川原田遺跡Ｊ－25・Ｊ－50・Ｊ－51号住居址出土土器（１：８）

半に付される隆線の動きが不明だが、横方向を意識した体部文様構成といえよう。

反面２・３の体部は直線状あるいは外反気味に開き、１の体部形態と差が見られる。文様構成も懸垂文を主描線としており、横位方向への意識は沈線文や短沈線に限られる。

Ｊ－25号住（第３図ａ）　「新巻類型」（１）とその変化形？（２）さらに勝坂式（３）が伴出している。少数の共伴例ながら「新巻類型」（１）の遺存状態は良好で全体が観察できる個体である。平縁で幅狭の口縁部文様帯を形成し、体部はほぼ直線状に開く形態を取る。体部文様帯は隆線主描線の懸垂文構成で横位意識は上半の沈線文に限られる。今回「新巻類型」の変化形とした２は、あるいは異系統の可能性を含み、検討を要する。口縁部・体部文様帯とも沈線による方形区画が充塡され、区画内の横位短沈線が示唆的である。

Ｊ－50号住（第３図ｂ）　「新巻類型」（１～４）と阿玉台II式（５・６）さらに縦位撚糸文施文の深鉢（７）が共伴する。破片では勝坂１式などが出土している。「新巻類型」の出土量が充実するが、標準的な在り方を示す例は１のみである。他は遺存度も良くなく、２～４は沈線のみの懸垂文構成が見られるのみである。標準的とした１も、側線沈線や横位意識の沈線文が施文されておらず、本住居跡出土の「新巻類型」は、変化要素が多く認められる一群と捉えられよう。

Ｊ－51号住（第３図ｃ）　個体では、４個体の「新巻類型」（１～４）と小型深鉢底部（７）や浅鉢（６）が伴出するが、破片では阿玉台式（５）が見られる。１・２・４の「新巻類型」は甕状深鉢で体部に顕著な膨らみを設けるように、３個体とも特徴的な文様構成を示す。１・４は口縁部～体部文様帯を嵌入する意匠文が配されている。１の口縁部文様帯は、頸部の段で画され頸部隆線等の積極性を持った分帯線を付さない。４も頸部隆線は付されず、沈線のみの分帯で口縁部文様帯と体部文様帯を連繋する手法が容易になっている。両個体とも、口縁～体部にかけて反転する隆帯懸垂文を配した文様構成と判断できよう。

反面２には頸部隆線が付され、口縁部文様帯は沈線を劃線とする区画文を配列する。さらに、体部文様帯は大型突起を中核として懸架状や逆Ｕ字状の不定形懸垂文相互を連接する文様構成である。口縁部文様帯と体部文様帯が独立した意匠を配す例は「新巻類型」でも希少な例と考えた。３に関しても口縁部文様帯が画され、体部文様帯も「新巻類型」の標準的な文様構成と捉えられる。頸部隆線が付され、口縁部文様帯と体部文様帯に同一の意匠が配されている。

本住居跡の土器群の組成は、「新巻類型」が主体となっており、器形も大型で甕状を呈すように、特殊な在り方を示す。「新巻類型」の安定した段階であろうか。

このように、川原田遺跡における「新巻類型」を含む住居跡出土土器を概観し、「新巻類型」の特徴を述べてきたが、その安定的な出土量は、利根川上流域の「新巻類型」出土遺構を凌ぐ存在である。共伴する土器群としては、阿玉台II式・勝坂１式が明確に伴出している。また、浅鉢の伴出も阿玉台式との関係上興味深い現象である。さらに、「新巻類型」の特徴として、平縁を呈す

深鉢が比較的多く、利根川上流域で特徴的な波状口縁深鉢は客体的な存在のようである。平縁を呈す「新巻類型」の器形特徴としては甕状深鉢が挙げられよう。Ｊ－51住では３個体がまとまって出土している。この甕状深鉢の一部には、口縁部文様に体部文様が嵌入する手法が存在し、この手法も川原田遺跡「新巻類型」の顕著な特徴といえよう。

（２）　川原田遺跡「焼町類型」と共伴土器

「焼町類型」はＪ－２号住・Ｊ－４号住・Ｊ－５号住・Ｊ－11号住・Ｊ－12号住の５軒に良好な伴出が見られる。

Ｊ－２住（第４図ａ）　４個体が個体図示されている。１を「焼町類型」と捉え、他の３個体は勝坂式終末と考えたが、各々型式特定には確証性に乏しく問題は残る。

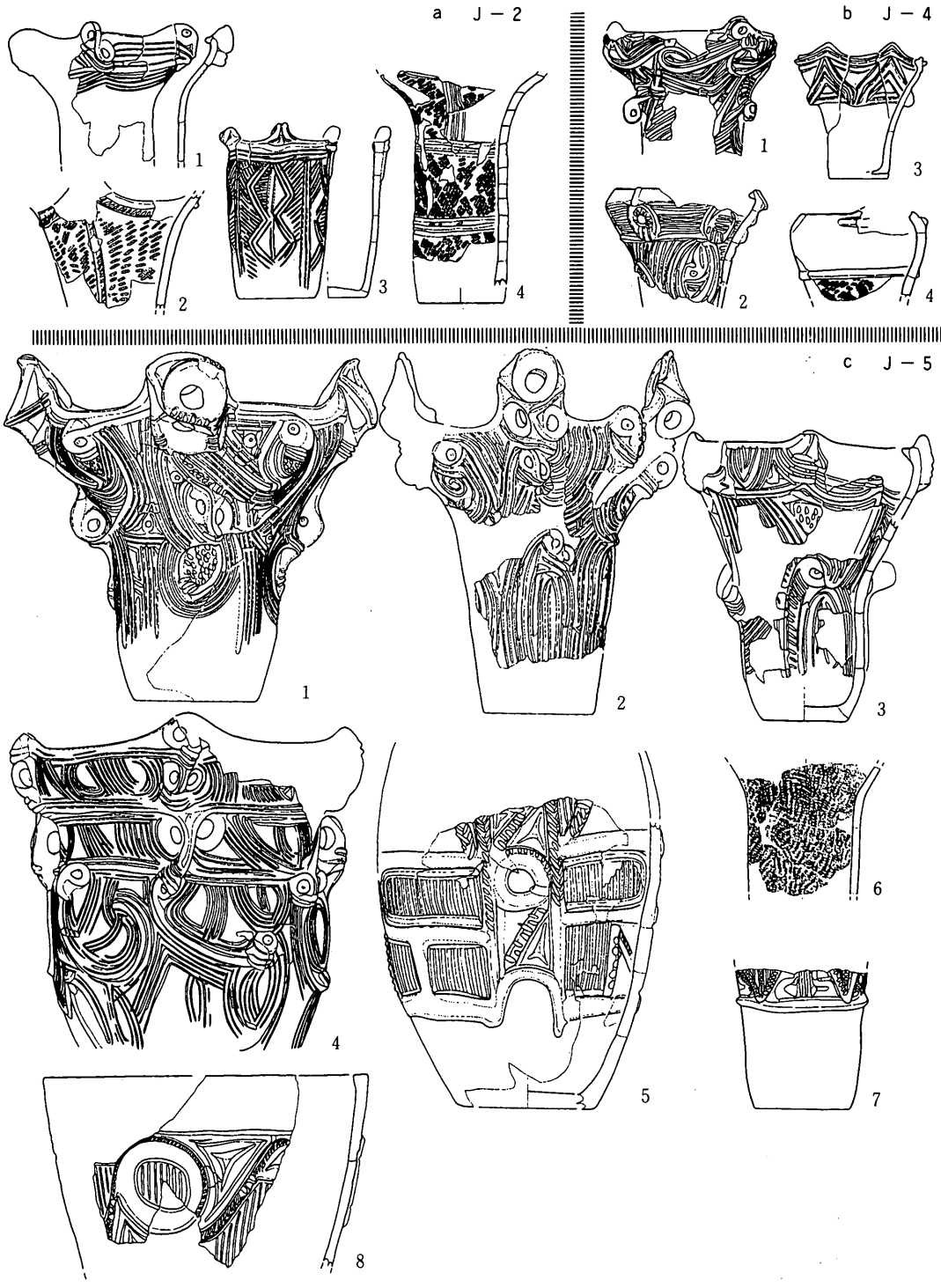
「焼町類型」とした１は、幅狭の口縁部文様帯に斜位環状突起を中核として横位沈線が繋がる。特に頸部隆線下の横位弧状沈線の施文方法は突起が意識されており、単なる側線施文ではない。体部文様が省略されたのか無文であり、「焼町類型」本来の文様構成と差が見られる。変化形であろうか。

Ｊ－４住（第４図ｂ）　主に「焼町類型」が占める。１・２が個体図示されている。その他には口縁部に三角形区画が配された３や内彎口縁部が無文で体部縄文施文の深鉢（４）が共伴しており３・４とも勝坂式終末期に比定されよう。

「焼町類型」の２個体の特徴としては、１には口縁部文様帯として画す頸部隆線が付せられず、２は頸部隆線が付せられ口縁部文様帯を画す。１は横位Ｓ字状意匠が連繋しており、この連繋線が口縁部文様を単位文として構成する。２は縦位楕円状意匠を中核とした横位沈線が連繋している。これも、縦位楕円意匠文が単位文として独立した様相を見せる。Ｊ－４住は単位文を口縁部文様帯に配した「焼町類型」と勝坂式終末期の伴出といえよう。

Ｊ－５号住（第４図ｃ）　「焼町類型」４個体（１～４）の充実した出土量である。伴出する土器は勝坂式（５・７・８）や縄文施文のみの深鉢（６）が見られる。

環状突起を４単位付す１・２、緩やかな波状口縁を呈す３・４を「焼町類型」とした。１・２とも明瞭な口縁部文様帯を画さないが、眼鏡状突起や環状突起を体部上半に付し隆線で連結し、体部下半を懸垂文構成に充てる文様構成である。体部中位の彎曲部に設けられた環状突起を劃線要素とする手法であろうか。口縁部の大型環状突起を波頂部とすると、波底部対応の施文域に小型の環状突起を配しており、文様割り付けは整然とした配置が意識されたものと捉えられよう。尚、２の体部懸垂文の一部は横位弧状に連繋しており、厳密な懸垂文構成を呈さない。体部中位の円形区画は単位文と解釈でき、単位文を含めた懸垂文構成と考えられよう。さらに口縁部に明瞭な分帯線を設けていないためか口縁～体部文様が連繋した一体化構成を呈す。

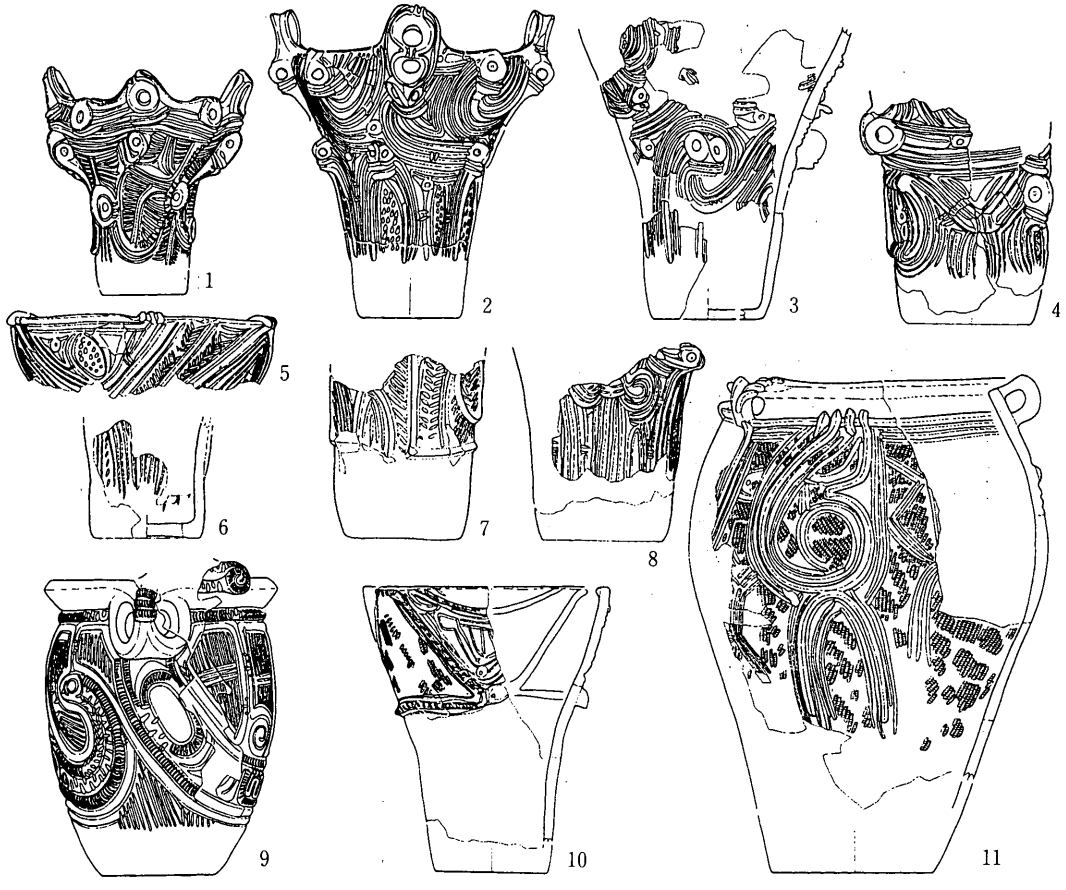


第４図　川原田遺跡Ｊ－２・Ｊ－４・Ｊ－５号住居址出土土器（１：８）

小波状口縁を呈す３・４は頸部隆線で口縁部文様帯を画す。何れもやや幅狭の口縁部文様帯で弧状の短沈線が充塡される。遺存状態の良好な４では、頸部に幅狭の文様帯を設け、口縁部と同様に短沈線を充塡する。体部は上半が渦巻文下半に分岐状懸垂文を配す。

本住居跡は、「焼町類型」と勝坂３式の共伴が見られたが、「焼町類型」が主体となる土器群であり、その文様構成に数種類の例が看取される。

Ｊ－11号住（第５図）　Ｊ－５住同様「焼町類型」を主要な組成とする。８個体を「焼町類型」とした（１～８）。共伴する土器として９・10の勝坂３式、11の樽状深鉢が見られる。その他では、破片だが口縁部蛇行隆線文も見られる。「焼町類型」とした１・２は４単位の環状突起を波頂部とする深鉢で、口縁部下の波底部対応施文域に小突起を付しており、整った文様構成を示す。また、１は口縁部文様帯を画し、反対に２は明瞭な分帯線を設けておらず、Ｊ－５住２に見られた口縁～体部文様が連繋した一体化構成を示す。その他の「焼町類型」では４の体部上半に設けられた幅狭の文様帯や７の体部下半に見られる横位区画線にも注意を要したい。異系統の土器で

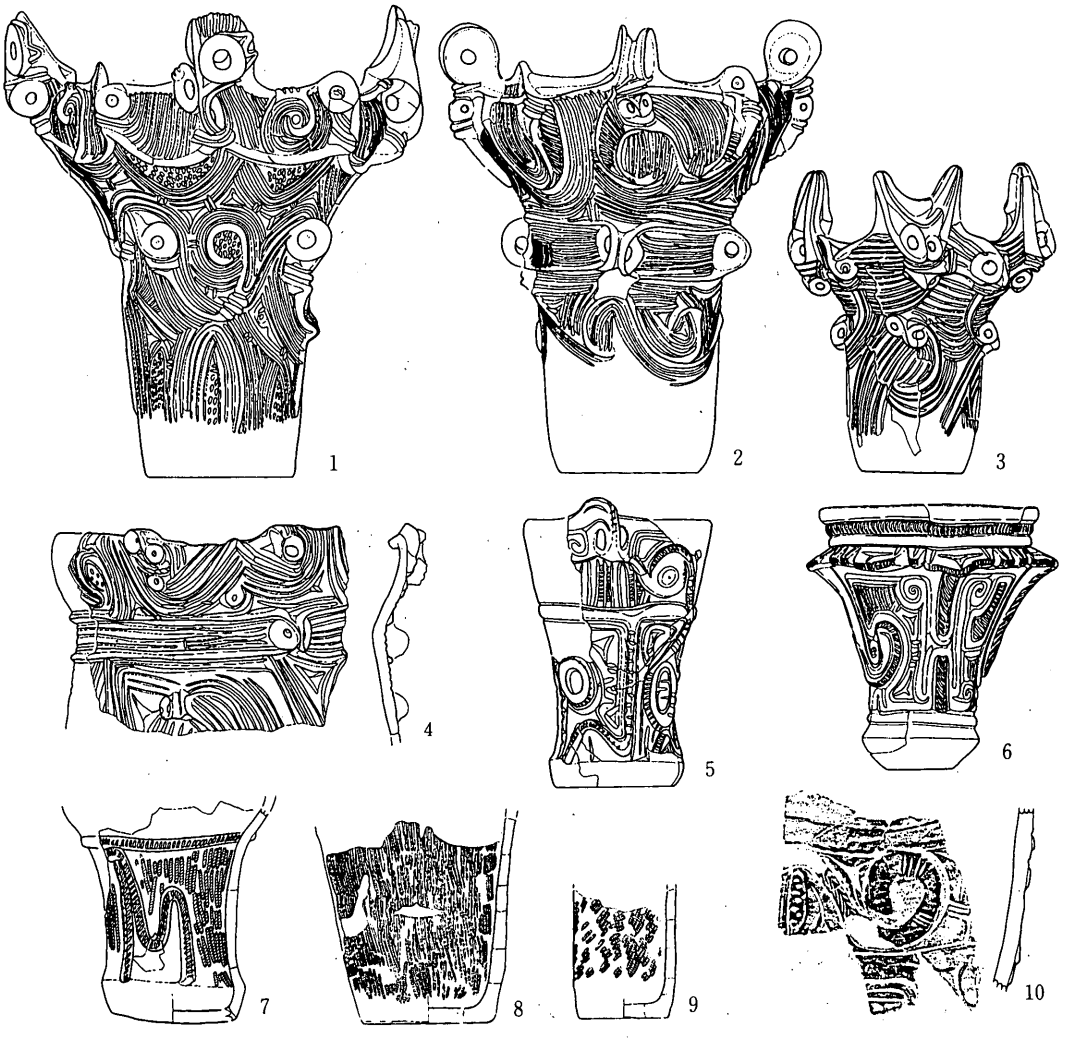


第５図　川原田遺跡Ｊ－11号住居址出土土器（１：８）

は11の樽状深鉢に問題が残る。体部文様のみで、縄文施文・側線1本描きの沈線・短沈線の意匠などの諸要素を兼ね併せると、「新巻類型」の変化形とも捉えられるが、主描線による渦巻状意匠と分岐状懸垂文が連結した文様構成は従来の「新巻類型」には見られない構成である。

本住居跡は、「焼町類型」を主体とした組成で、勝坂3式と「新巻類型」の変化形？との共伴が見られ、J－5住と同様「焼町類型」の文様構成に数種類が観察された。

J－12号住（第6図）　本住居跡も「焼町類型」の出土が豊富である。図示した4個体（1～4）以外にも口縁部や突起周辺の破片が見られる。共伴する土器は勝坂式3個体（5～7）、破片ではあるが（10）が目立つ。また、縄文施文の深鉢体部下半（8・9）もおそらく勝坂式と判断できよう。



第6図　川原田遺跡J－12号住居址出土土器（1：8）

「焼町類型」では4単位の口縁部突起を付す例（1～3）は遺存状態が良い。突起形状は環状（1）・眼鏡状（2）・双波状（3）と多種であり、口縁部劃線を内彎部に設け、体部文様帯を懸垂文とする1・3、体部上半に設けられた幅狭の文様帯を劃線とし、下半を弧状隆線で横位に連繋する2と「焼町類型」内部でも突起や文様構成に多様性がみられる。しかしながら、波底部施文域に付せられた口縁部小突起は3個体とも共通性があり、この施文域を中核に隆線が派生する文様構成方法といえよう。2に見られた体部上半の幅狭の文様帯は4にも見られ、「焼町類型」における口縁部と体部文様帯を画す重要な劃線と位置付けられよう。

本住居跡出土遺物は、J－5住やJ－11住と同様、「焼町類型」を主体とした組成で、勝坂3式も比較的濃密な共伴を示す。J－11住と同様に、「焼町類型」の文様構成には多様性を含む。

以上のように、「焼町類型」を出土する住居跡出土土器を概観した。共伴関係としては勝坂3式の伴出が明瞭であり、「焼町類型」の時間的な位置が再確認できよう。また、J－11住・J－12住に見られる「焼町類型」の安定的な出土量は、利根川上流域には見られない様相である。

文様構成の特徴としては、口縁部文様帯を設ける個体と設けない個体があり、口縁部文様帯を設けない土器は、口縁～体部文様帯が一体化する傾向が見られる。また、体部文様は懸垂文構成を主体とし、体部上半の幅狭の文様帯とともに、「焼町類型」の後半段階の様相を提示している。口縁部文様帯では、正4単位構成の突起が付され、さらに波底部の突起貼付が全体の印象を整えている。「焼町類型」の複雑な文様にも、文様構成を維持する手法が一貫しているようだ。

本節では、川原田遺跡住居跡出土土器の「新巻類型」・「焼町類型」を中心とした組成及び両類型の注意する特徴を雑駁に述べてきたが、次節では、この特徴の幾つかを考えてみたい。

3　川原田遺跡「新巻類型」・「焼町類型」の特徴

川原田遺跡で検出された住居跡出土土器のうち、「新巻類型」と「焼町類型」を擁する出土土器群と共伴例を概観し、あらためて両類型の特徴を述べてきたが、利根川上流域に見られる「新巻類型」や「焼町類型」との若干の差が見られるため、ここで相違点を挙げておきたい。ただし、この相違点が千曲川流域及び利根川上流域の「新巻類型」・「焼町類型」の地域差とは断定はできない。資料増加を以て、比較分析を試みたい。

（1）　「新巻類型」への所見

川原田遺跡の「新巻類型」に共伴する型式は、阿玉台式と勝坂式である。これは利根川上流域とほぼ同様の共伴例である。また、浅鉢も利根川上流域では出土量が多く屢々「新巻類型」と伴出する。

本遺跡の「新巻類型」には、山形の波状口縁を呈す深鉢が比較的少なく、平縁・甕状深鉢の出土が目立つ。文様構成も、口縁部文様帯を設ける例と口縁部文様帯を「省略」する例があり、J－51住のように、この2例が共伴する住居跡も認められた。さらに、甕状深鉢の一部には口縁部文様に体部文様が嵌入する手法が見られる特徴を持つ。このように、同系統の土器群の共存の内部で、文様構成に差を設けた個体の共伴は興味深い。同系統の個体相互に異系統の文様構成効果を保たせたのであろうか。

また、甕状深鉢は、中期では阿玉台式の一部に見られる器形ではあるが、その多くが大型波状口縁を呈し、本遺跡の「新巻類型」甕状深鉢のように平縁もしくは小波状口縁ではない。阿玉台式の甕状深鉢の器形を受容した「新巻類型」が口縁部文様帯を「省略」する手法を推定すれば、波頂部を省略した形態が甕状深鉢とも捉えられよう。さらに、J－25住1に見られる平縁の深鉢口縁部文様帯は幅狭であり、これは波状口縁波頂部が「省略」され、波底部文様が横位に展開した結果と考えられよう。

次に、「新巻類型」甕状深鉢に見られる口縁部文様に体部文様が嵌入する手法－口縁部と体部文様が一体化する手法を考えてみよう。この手法は、阿玉台式の文様構成の基準には無い構成方法である。口縁部嵌入手法は、中期土器群にあって前半期に量的には少ないが、北信～東信地域の「深沢タイプ」(註6)等に見られる手法である。在地の土器より派生した要素として位置付けられる。反面、利根川上流域同様、本遺跡の「新巻類型」も阿玉台式との共伴が見られる。無論勝坂式との共伴も通常であるが、阿玉台式が「新巻類型」の背後に存在する現象から、「新巻類型」は阿玉台式とは対峙しておらず、阿玉台式との相互交渉が想起される。また、勝坂式との共伴も充分射程に入れておかねばならず、やはり文様構成方法や文様要素を交換する例を捉えなければならないだろう。さらに、「新巻類型」甕状深鉢を阿玉台式甕状深鉢の波状部を省略した形態とした仮定から、阿玉台式甕状深鉢の波状口縁部を省略し、頸部以下の器形を「新巻類型」が受容し、本来波頂部に設けられる文様を省略し、頸部以下の文様を口縁部に配したため、口縁～体部に嵌入した文様に変化し、一体化が果たされた結果とも捉えられる。文様帯の省略は、勝坂式など中期土器群に屢々看取される例で、「新巻類型」が中期中葉の土器群内にあって、器形と文様省略手法を周辺型式より受容したものと考えられよう。

しかしながら、「新巻類型」と阿玉台式甕状深鉢との関連は、利根川上流域では観察されておらず、本遺跡の「新巻類型」甕状深鉢が阿玉台式の器形と勝坂式等の文様帯省略手法による所産とは確定できない。甕状深鉢に関しては、千曲川流域に斜行沈線文を配す土器群に共伴する「水甕形深鉢」にも例があり(註7)、この土器群との系統性も充分妥当性が充てられる。今後検証を重ねたい。

川原田遺跡及び千曲川流域の「新巻類型」は、確かに、東信・北信地域の中期土器群との密接

な繋がりが認められる。これらの土器群は、「新巻類型」発生の母胎の一つと位置付けられる土器群ではあるが、筆者は、あくまでも共伴する土器群を重視し、利根川上流域に見られる阿玉台式との共伴が「新巻類型」の発生に大きな関与を果たしたと考えたい。川原田遺跡「新巻類型」も、阿玉台式と共伴しながら短期間ながら立場を保有する土器群として考えている。

（2）「焼町類型」への所見

川原田遺跡「焼町類型」は量的にも多く、利根川上流域に比してまとまった出土量を誇る。J－11住やJ－12住のように土器群の組成の中でも主体をなしており、「焼町類型」の安定的な様相が看取できよう。共伴する土器群も勝坂3式との伴出が確認されており、中期中葉末段階に比定される特徴ある土器群として再認識されよう。筆者が「焼町類型」の特徴の一つとして挙げた、体部下半の横位一次区画線の存在は、本遺跡の場合稀薄であり、1～2個体の体部下半に認められたのみである。体部文様帯の主な構成方法は懸架状あるいは懸垂文構成であり、「焼町類型」の後半段階とも位置付けられる一群が多い。ただし共伴資料からは終末期的な段階ではなく、口縁～体部文様が完全に一体化した懸垂文構成は示していない（註8）。

「焼町類型」も先に述べた「新巻類型」と同様に口縁部文様帯の在り方に差がみられ、口縁部と体部文様が一体化した文様構成が認められた。この現象もあるいは、同系統の土器群の共存現象内で、文様構成に差を設けた個体が共伴する例とも捉えられよう。この結果、同系統の土器群内で個々の土器の個性が際立つ現象が認められる。「新巻類型」では、同系統の個体相互に異系統の文様構成効果を保たせたとしたが、「焼町類型」においても、同等の現象を捉えておきたい。

また、本遺跡の「焼町類型」の多くは、整然とした4単位口縁部突起を付し、対応するように波底部対応の小突起も設けられている。文様の割り付けが整っており、定められた位置に突起を付し、曲隆線や沈線で連繋している（註9）。「焼町類型」においては環状突起や眼鏡状突起が文様意匠の中継点としての重要な要素が確認されよう。共伴する勝坂3式は、器面区画文化や単位文としての大型意匠文配置といった主文様構成に傾斜しており、「焼町類型」の主文様構成とは差が認められる。「焼町類型」の後半段階においては共伴する勝坂式との文様構成差が顕著になるようである。「焼町類型」が独自の立場を得た段階と捉えられよう。

さらに、体部上半の幅狭の文様帯を設ける例もあり、この幅狭の文様帯が分帯線として位置付けられる構成である。体部上半の幅狭の文様帯は、「焼町類型」に顕著な文様帯で、概ね横位沈線が充填される。環状突起等で分割され、波頂部あるいは正面と整合した位置に突起が付されるようだ。単なる分帯線ではなく、上位と下位文様帯を連繋する文様構成要素と捉えて良いだろう。また、幅狭の口縁部文様帯との転写・移動関係にある文様帯の可能性を示唆しており、「焼町類型」を語る中で重要な文様帯と位置付けたい。

突起についても若干触れて置きたい。J－12住の「焼町類型」4個体は様々な口縁部突起意匠が付せられており、同一遺構内の同系統土器群における口縁部上の加飾要素に多くの多様性が具現化された例として評価されよう。共伴する同系統の土器群内で文様構成の差を設ける手法が口縁部突起に及んだ可能性もある。また、先にも述べた口縁波底部の突起貼付と呼応して、4単位の突出する大型突起の意匠は、「焼町類型」特有の印象とも捉えられ、他の土器群と明瞭に分別できる文様構成の一つと考える。さらに、波頂部突起下には連接する環状あるいは眼鏡状突起が設けられており、縦位連接環状突起は後半段階の「焼町類型」の主要な要素となっている。

川原田遺跡の「焼町類型」は、「新巻類型」と同様に異系統の土器群と共伴し、かつ共伴する同系統の土器群内部でも、文様構成差を設け、複数の文様構成を共存させている。そのような複雑な土器様相の中で、正4単位構成の深鉢が占め、波頂部と波底部の意匠が確立しており、「安定」した「秩序」を想起させる。これは出土個体量にも反映されており、川原田遺跡に置ける「焼町類型」の安定的な出土量は、他の中期中葉遺跡で出土する「焼町類型」を圧倒する様相である。「焼町類型」後半段階の安定した様相を提起する出土例である。

以上のように川原田遺跡の「新巻類型」・「焼町類型」とも出土量が豊富で、「新巻類型」はJ－50住・J－51住で、「焼町類型」はJ－5住・J－11住とJ－12住で安定した出土数を得ている。同系統の土器群が主体を占める様相として位置付けられ、川原田遺跡の両類型の在り方を考えさせる型式組成といえよう。今回は、まとまった出土土器群の文様構成の様相から、若干の観察項目を見いだしたが、その中で注意する事項として、一遺構内で共伴する同系統の土器群に複数の文様構成が存在する例が、両類型の内在する性格の一端を現わしているようだ。複数の文様構成の具体的な例としては、口縁部文様帯と体部文様帯を画す伝統的な構成を呈す例と口縁部文様帯を画さず、体部文様と口縁部文様を一体化した構成方法が挙げられる。同系統の個体相互に異系統の文様構成効果を保たせた現象といえ、いわば同系統の土器群内に、継続性と変容性の両極を兼ね備えた文様構成を看取できよう。変容性を有する文様構成は、口縁部と体部文様を一体化する構成と捉えられ、特に「焼町類型」は終末期段階で、著しい一体化の果てに懸垂文一体化構成をとる例も見られる。

このように安定した段階を示す類型の一括資料の内部にも、変容性を内包する一群が存在する。換言すれば、両類型は変容を重ねる他の型式群と同等の変容要素を保有しており、この変容要素の保有が、異系統の共存の中で特有の立場を得たのではないだろうか。

4　川原田遺跡土器群の組成

前節では、両類型を豊富に出土する住居跡に注意を払い、両類型の特徴を考えてみた。この特徴のいくつかは、安定的な同系統の土器群の出土と同時に異系統の共存が果たした現象と捉えられよう。ここでは、両類型を伴出する一括資料の型式組成を再度考え、川原田遺跡出土土器群が提起する意味を探ってみたい。

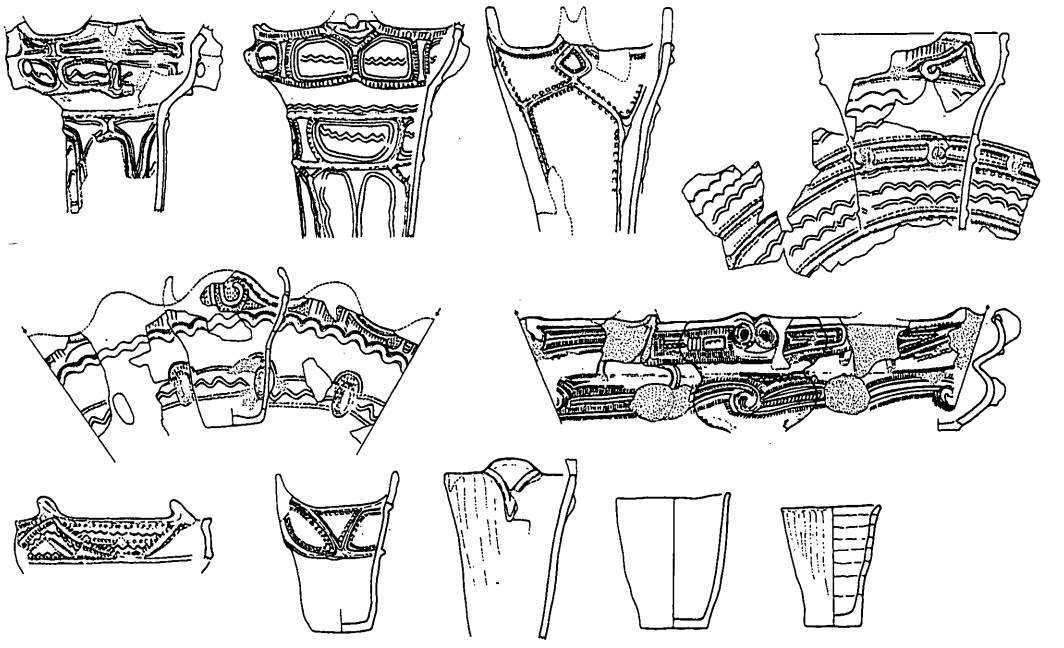
川原田遺跡では、「新巻類型」・「焼町類型」ともまとまった出土状態を呈し、その様相は、一集落内で両類型が「定形」と「秩序」を持った存在のように映る。実際には、類型内部では伝統的な継続性と変容性が交叉し、複雑な位相を保ち続ける土器群なのではあるが、継続性と変容性は、中期土器群においては一種の「秩序」であり、複雑な位相は「定形」として捉えられるのではないだろうか。このことは両類型とも、偶発的な不定形なものではなく高次の土器群としての位置付けが可能であり、先にも述べたように、異系統土器群共存の一端を担う一群として、中期土器群内に存在するのである。異系統土器群の共存は一遺跡・一遺構内の一括資料に具体化され、例えば、1軒の住居跡より得られる複数の異系統土器群の組み合わせ（型式組成）は、時期相・地域相を具体的に表現する資料でもある。つまり、型式組成とは複数の型式・類型の複合状態であり、この型式組成の比較や変遷を明らかにする作業や組成内での土器群相互の役割や類型の存在形態を明らかにすることは、今後中期土器研究に必要な分析と考える。

今回は、上記に挙げた作業や分析をすべて行うには、時間的な制約もあり及ばない。両類型をとりまく型式組成を概観するにとどめ、詳細な分析は稿をあらためたい。

（1）　両類型をとりまく型式組成

前々節でのべたように、「新巻類型」は阿玉台II式・勝坂1式と共伴する。第2図・第3図にその様相は挙げたが、特にJ－51住は4個体の深鉢がまとまっており、型式組成の中核をなす。前々節では「新巻類型」の安定した段階と捉えたが、単純な組成に近いといえよう。「焼町類型」は勝坂3式と明瞭に共伴する（第4～6図）。J－5住・J－11住・J－12住は「焼町類型」主体の組成を示しており、やはり安定した段階と考えた。

利根川上流域の両類型をとりまく組成は、「新巻類型」に関しては、勝坂1式と阿玉台Ⅰb式～II式と共伴するが、量的には阿玉台式に比重が置かれ、「新巻類型」は1個体程度の伴出を見せている。「焼町類型」は川原田遺跡と同様に勝坂3式と明瞭な共伴関係を示し、加曽利E式出現期の土器群も加わる遺構もある。出土量は勝坂3式あるいは加曽利E式出現期の土器が多く、「焼町類型」の伴出も1個体程度である。このように、利根川上流域では、両類型を中心とした型式組成を構成していない。まず、利根川上流域の「新巻類型」周辺の型式組成に関して考えてみよう。当地



第７図　子和清水貝塚106号住居址出土土器

域においては、阿玉台Ｉｂ～II式が濃密に分布し、阿玉台式が型式組成の中核をなす。これに加えて、勝坂式や「新巻類型」が共伴しており、異系統土器群の共存関係が明瞭に看取される。この現象の要因としては、利根川上流域が阿玉台式分布圏の外縁域にあたるため、阿玉台式が、周辺及び在地の土器群と共存した型式組成を生み出したのではないだろうか。次に、利根川上流域「焼町類型」に関しても、勝坂３式あるいは加曽利Ｅ式出現期の土器群が型式組成の基盤となり、「焼町類型」が加わる様相である。これも、当地域が勝坂式の分布圏の縁辺にあたるため、各土器群・類型が組成に加わる現象と捉えられよう。千曲川流域も勝坂式と阿玉台式の分布圏縁辺にあたる。故に流域の中期中葉の遺跡では、異系統土器群の共存現象による型式組成は普遍であり、利根川上流域の該期型式組成と近似した様相を呈す。

（２）　川原田遺跡出土土器の独自性

両流域における型式組成と対照的に、東関東地域の阿玉台式段階の型式組成は、特にＩｂ式～II式期では阿玉台式が主体を占め比較的単純な構成を示す。参考として第７図に当地域の松戸市子和清水貝塚106号住出土土器を集めた。勝坂式との共伴が認められるものの、阿玉台II式主体の型式組成といえよう。反面、勝坂式の型式組成は複雑である。確かに、勝坂式のみで構成する型式組成も認められており勝坂式の標準となっている(註10)。しかし、勝坂式の濃密な出土で知られる多摩地域における小金井市中山谷遺跡29号住（第８図）出土土器群の様相も、口縁部三角区画文構成の土器や抽象文を配す土器、有孔鍔付土器が共存し、かつ阿玉台式も含む型式組成を提示

第8図　中山谷遺跡（第9次～11次）29号住居址出土土器

する。このように勝坂式の内部には様々な類型が存在しており、勝坂式主体の組成でありながら、多種類型が共存した形態を示している。換言すれば、類型の複合体が勝坂式を構成しており、これは、単純な組成を示す阿玉台式の型式組成と対照的であり、2極の土器型式の在り方を考えさせる型式組成である。また、勝坂式の場合、類型間相互の文様交渉も文様組成変化といった現象で具現化している。つまり、勝坂式は異系統共存現象が型式に反映しており、勝坂式の型式組成は、異系統土器群または各種類型を受容し得る構造を内包しているのである。

さて、千曲川流域及び利根川上流域における型式組成の在り方は、勝坂式の型式組成に近く、型式・類型の複合状態を示している。この観点から、川原田遺跡の「新巻類型」・「焼町類型」の在り方をみると、両類型とも異系統の土器群あるいは各種類型と共存する勝坂式的な型式組成の中で、安定性を保った状況が見いだされるのである。この安定性は型式組成中、出土比率が高い存在で示されており、J－50住やJ－12住のように「新巻類型」・「焼町類型」が主体となる住居跡が認められるのである。さらに前節で述べた、一遺構内で同系統の個体相互に異系統の文様構成効果を保たせる手法は、同系統共伴でありながら異系統の効果(変容を受容する存在)を同系統土器群内に置くことによって、異系統共存現象をも兼ねたのではないかとも捉えられよう。

このように、異系統共存現象という利根川上流域と同等の現象を持つ川原田遺跡出土土器ではあるが、型式組成の観点で考えると「新巻類型」・「焼町類型」の主体性が看取され、この組成から川原田遺跡出土土器の独自性が認識されよう。両類型とも、勝坂式・阿玉台式といった2極的な土器型式の分布圏縁辺で分布する土器群であるが、川原田遺跡出土土器群の様相は、縁辺部特有の様相なのかは検討の余地を残す。本稿では、千曲川中流域や信濃川流域の土器群には触れ得なかったが、当該地域の土器群との相互交渉も充分に予想されよう。今後の研究の進展を望みたい。

5　まとめ

川原田遺跡出土土器の様相を異系統土器群の共存現象から考えてみた。「新巻類型」・「焼町類型」を出土した各住居跡の出土土器を概観し、本遺跡における異系統土器共存現象を確認した。その結果、「新巻類型」は阿玉台II式と勝坂1式、「焼町類型」は勝坂3式と共伴する例を捉え、この共伴傾向は、利根川上流域と類似しており、両地域の土器群は極めて近い様相と捉えた。また、出土した「新巻類型」・「焼町類型」の各特徴を顧みて、「新巻類型」には甕状深鉢が存在し、この器形が波状口縁の希薄な川原田遺跡「新巻類型」において阿玉台式の甕状深鉢の波頂部省略形態と推定した。ただ、当該地域に分布する「斜行沈線文系土器群」に内在する「水甕形深鉢」との系統性も無視できないと考えた。「新巻類型」の文様構成では標準的な文様構成を呈す一群と口縁部と体部文様が一体化する一群の2例に注目した。さらに、「焼町類型」にも同様な文様構成

を呈す2例を捉え、共伴する同系統の土器群に複数の文様構成が存在する現象を指摘した。これは中期土器群における同系統の土器群内部の伝統性と変容性に係わり、両類型とも中期土器群内で独自の立場を保つと考えた。

さらに、両類型をとりまく型式組成に視点を当て、川原田遺跡における安定した「新巻類型」と「焼町類型」の組成からは、川原田遺跡における両類型の独自性を示唆した。つまり、川原田遺跡出土土器群は、独自の文様構成を持つ一群が独自に変遷し、独自に組成するのである。

ただ、千曲川流域は勝坂式や阿玉台式分布圏外縁にあたるため、型式組成に間隙が生じ易く、その間隙より他の異系統土器群が嵌入したり、取り込まれたりしたのではないだろうか。故に、本稿では両類型の独自性の意味するところまでは言及できなかった。勝坂式や阿玉台式に直接的あるいは関接的に関与する土器群の可能性、または千曲川中流域や信濃川流域の土器群との近縁性など、様々な可能性を模索する必要性があろう。

本稿では、川原田遺跡出土土器に関して何等明確な答を見いだせなかった。出土土器の様相からその意味を探ったに過ぎない。ただ、一遺跡のあるいは一遺構内の一括資料を基準とした型式組成を明らかにし、型式組成内の各類型や土器群の存在形態・動態を考えることによって、地域相や時期相をより鮮明にしなければならないだろう。本稿はその準備段階を示唆したにすぎない。

以上、川原田遺跡出土土器に関する筆者なりの考えを述べさせていただいた。時間の制約もあり、さらなる観察項目を設け詳細な分析に至らなかった点を反省したい。中期土器の正面観、器面色調と肌理の差など様々な視点が山積していながら、従来の視点を変えた分析手法には至らなかった。機会を改めて取り組みたい所存である。

最後に、川原田遺跡の土器の観察に際して、御代田町教育委員会堤隆氏・小山岳夫氏には常に温かいご配慮を得た。整理室の皆様にも随分とご迷惑をおかけした。皆様の土器の復元技術、さらに資料化に至る高水準は、他県の同業者として観察の際に大いに参考となった。

また、長野県内の研究者の方々にも多くのご指導ご鞭撻を得ている。初期の東部町久保在家遺跡資料実見にお世話になった小林眞寿氏。氏には川原田遺跡の存在をいち早くご教示いただいた。その後の久保在家遺跡の資料見学の際も、堀田雄二氏と坂井美嗣氏にお忙しい中丁寧な対応を受けた。寺内隆夫氏・野村一寿氏・綿田弘実氏・水沢教子氏にも常に有益なご教示を得てきた。県外研究者では、筆者の土器実見に同行していただいた、鈴木徳雄氏・江原英氏の先鋭な研究姿勢に刺激を受けた。そのほかにも多くの研究者のお世話になった。筆者は碓氷峠を越えて、利根川上流域に戻るが、この次は鳥居峠を介在して再度訪問を果たしたい。その際には、さらなるご指導をお願いしたい。

註

1 佐藤達夫　1974　「土器型式の実態―五領ヶ台式と勝坂式の間―」『日本考古学の現状と課題』　吉川弘文館

2 中期土器研究の視点は多い。例えば胎土の問題、使用痕など文様構成や文様要素以外の分析も土器の属性を明らかにする上で有効な手段と捉えている。土器文様にしても、編年のための文様分析にとどまらず、文様構造や文様構成方法など、時間軸を明確にする作業以外にも、様々な土器文様分析が試みられている。川原田遺跡の出土土器も多様な視点で論ずるべきであり、編年研究や小型式設定に終止する資料群ではない。まず、出土土器群の様相を明らかにすべきである。

3 山口逸弘　1989　「3　房谷戸遺跡における縄文時代中期前半の土器様相」『房谷戸遺跡Ⅰ』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下群埋文）

山口逸弘　1990　「群馬県における阿玉台式の諸様相」『研究紀要』7　群埋文

山口逸弘　1991　「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成」『土曜考古』第16号　土曜考古学研究会

4 野村一寿　1984　「塩尻市焼町遺跡1号住居址出土土器とその類例の位置付け」『中部高地の考古学』Ⅲ　長野県考古学会

野村一寿　1988　「縄文中期の土器　中期中葉の土器」『長野県史考古資料編　全一巻（4）』　長野県史刊行会

野村一寿　1990　「土器集中区出土の土器」『松本市坪ノ内遺跡』　松本市教育委員会

5 赤山容造　1991　「どのようにして三原田式が生まれたか―半隆起線文手法の系統について―」『群馬県立博物館紀要12号』　群馬県立歴史博物館

寺内隆夫　1992　「浅間山東側からの視線・西側からの視線―焼町土器の成立をどうとらえるか―」『長野県考古学会誌』67　長野県考古学会

小林眞寿　1996　「浅間山麓の縄文中期中葉土器論―焼町土器の研究―」『長野県考古学会誌』80　長野県考古学会

6 寺内隆夫　1991　「長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62合併号　長野県考古学会

7 寺内隆夫　1996　「斜行沈線文を多用する土器群の研究―『後沖式土器』設定は可能か―」『長野県の考古学㈶長野県埋蔵文化財センター研究論集1』　㈶長野県埋蔵文化財センター

8 終末期の「焼町類型」は懸垂文構成で半割状沈線を側線とし、共伴資料も勝坂3式に加え加曽利E式出現期の土器群が認められる。見眼遺跡や三原田遺跡に出土例が知られることから、この型式組成は利根川上流域に限られるようである。

9 対称性を保つ文様構成は、利根川上流域の場合、阿玉台式や大木式に関連を求められるが、本遺跡の「焼町類型」の場合は、千曲川下流域及び信濃川流域の土器群にも例を求めたほうが妥当性があろう。

10 新道遺跡1号住出土土器が知られる。藤森栄一　1965　『井戸尻』　中央公論美術出版

上記註以外の参考文献

赤山容造　1990　『三原田遺跡』第二巻　群馬県企業局

安孫子昭二　1988　「勝坂式土器様式」『縄文土器大観2　中期1』　小学館

新井順二　1986　『下佐野遺跡II地区(1)縄文・古墳時代編』　群埋文
今福利恵　1991　「勝坂式土器様式の個性と多様性」『考古学雑誌』76-2
今福利恵　1991　「変容する勝坂式土器」『多摩のあゆみ』第62号　多摩中央信用金庫
植田　真　1988　「組成論・勝坂式土器」『季刊　考古学』第17号　雄山閣
大塚昌彦他　1987　『行幸田山遺跡』　渋川市教育委員会
唐木孝雄他　1988　「第19節　吉田向井遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2　長野県埋蔵文化財センター
小林眞寿他　1986　『不動坂遺跡群II・古屋敷遺跡群II』　長野県東部町教育委員会
小林眞寿　1995　『寄山』　佐久市教育委員会
佐藤達夫　1976　「勝坂式成立の問題点」『北奥古代文化』8　北奥古代文化研究会
下総考古学会　1985「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8
高橋　保　1990　『清水上遺跡』　新潟県教育委員会
谷井　彪　1977　「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(前)(後)」『信濃』2-4　信濃史学会
谷井　彪　1977　「勝坂式土器の文様構成について」『埼玉考古』16号　埼玉考古学会
谷井　彪　1979　「縄文土器の単位とその意味」『古代文化』31-2・3　早稲田大学考古学会
谷井　彪　1988　「阿玉台式土器様式」『縄文土器大観2』　小学館
谷井　彪　1991　「勝坂式土器の変形にかかわる二三の要素」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
塚田　光　1964　「群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器」『下総考古学』1　下総考古学研究会
寺内隆夫　1984　「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』7　下総考古学研究会
寺内隆夫　1986　「縄文時代中期中葉土器の分類と検討—異系統土器との関係を中心として—」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
戸沢充則他　1970　『後田原遺跡』　岡谷市文化財調査報告第3集　岡谷市教育委員会
中山真治　1987　『中山谷遺跡—第9次～第11次調査（1981～1983）—』　小金井市中山谷遺跡調査会
中島豊晴他　1980　『松本市笹賀牛の川遺跡』　松本市教育委員会
羽鳥政彦　1986　『田中田・窪谷戸・見眼遺跡』　富士見村教育委員会
羽鳥政彦　1987　『向吹張・岩之下・田中・寄居遺跡』　富士見村教育委員会
伴　信夫　1974　「荒神山遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市内　その1・その2』　長野県教育委員会
堀田雄二他　1992　『久保在家遺跡』　長野県小県郡東部町教育委員会
松戸市教委　1978　『子和清水貝塚　遺物図版編』1　松戸市教育委員会
三上徹也　1986　「中部・関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51　長野県考古学会
山口逸弘　1992　「大和田遺跡出土の中期縄文土器について」『群馬考古学手帳』3　群馬土器観会
山口逸弘　1992　「新道系土器群の変容過程」『研究紀要』9　群埋文
山口逸弘　1995　「波状口縁「新巻類型」の文様構成について—増殿遺跡31号住居跡出土深鉢の紹介—」『群馬考古学手帳』5　群馬土器観会